

平成二十二年
年度夏季

全国大学国語国文学会大会(第一〇一回) 研究発表要旨

於 同志社女子大学
六月六日(日)

A会場

『日本靈異記』に描かれた地獄の性格

同志社女子大学大学院研究生 片山 由美

仏教は六世紀に日本に伝来し、徐々に庶民への浸透をはかりつつ、奈良時代までに多くの説話を形成した。平安時代初頭にその一六話が景戒によって『日本靈異記』として編まれた。仏教はインド伝来の輪廻思想をもち、輪廻を繰り返す世界として六道を説く。天・人・修羅・餓鬼・畜生・地獄である。ところが、『日本靈異記』には、このうち苦の世界として人から地獄・畜生への転生、望ましい世界として人から人への転生をあげるだけで、経の言葉を除けば、話として天道・修羅道・餓鬼道が説かれることはない。また、転生する世界としての地獄は冥界と重ねながら説かれることが多い。奈良時代の仏教者あるいは景戒は何故地獄だけを冥界に重ね、冥界を地獄に絞って描こうとしたのであろうか。

柳田國男は日本の民俗調査にもとづいて、日本人はもともと死者の霊は霊山の頂きや海のかなたの祖霊の世界に移ると考えていたと説いた。もし古代の人々の冥界観がこのようなものであったとすると、彼等は仏教の説く苦の伴う地獄の思想に大きな違和感、恐怖感、ショックを受けたに相違ない。景戒たち布教僧たちはこれを利用して、彼等の理念からする悪を犯す者は死後地獄に墮ちると説くことで、仏教的な理から外れた生き方をする人々を仏教の道理に叶った生き方に導こうとする意図があったとみることは容易である。このように冥界として地獄を描くことはかならずしも仏教の輪廻の思想

に叶っているようにみえない。こうした地獄には中国仏教の影響もあるが、すでに守屋俊彦氏などによってその関係が指摘されてきた『古事記』に描かれる冥界の要素とかわらせてみることで考え得るところがあるのではないか。『日本靈異記』の地獄のもつ独自性を追究し、景戒たち仏教者が死後転生する世界の一つであった地獄を冥界として限定して説くようになった狙いと意義について考察を加えてみたい。

口伝・記録と説話

同志社女子大学嘱託講師 佐藤 愛司

寺院資料の中には多くの口伝や記録が含まれているが、これらは法の伝授の安定的な継承のために、代々記されたものと考えられる。しかし口伝や記録には、儀式の運営や法脈の系譜などの現実的な記述の他に、高僧の逸話や、伝授の時に現れた奇瑞や夢を記したのもみられる。このような説話と接する要素を持つ記述は、現在の視点からすれば、非現実的要素ともいえるが、当時においては、議論の優劣を決する証左となるものであり、時には公請すら動かすものであった。すなわち社会的な機能を担う言説として重視されるものであったのである。

それらはまた、どのように説明しても抽象性が残る宗教的要素を説明するものであり、他とは異なって自らの伝授が正統であることを示すものであった。寺院資料からは、寺院において多くの「伝授をめぐる語り」が行われ、口伝として伝えられた事がうかがえるが、それらは法の伝授とその正統性の保証、そして他との差別化のため

に語られたつ成長し、いつしかそれ自体が伝えられる対象となつていったものと考えられる。

一方多くの説話が寺院という場の影響を受けて成立したことは、すでに広く知られている。口伝や記録に記された逸話は、繰り返し語られ書き継がれる中で、説話として独立しうるものとなつていったと考えられるし、その逆にすでに説話として知られている逸話が、何かを説明するために利用され、口伝や記録に記されることもあつたと思われる。両者は寺院という場において影響しあい、連動しあつていたのでないだろうか。

本発表では特に真言寺院に伝来する資料を中心に、鎌倉時代の口伝や記録を検討し、説話との関係を考えたい。

春日なる三笠の山に出でし月

—平城京の東—

奈良大学教授 上野 誠

「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」(『古今和歌集』巻九の四〇六)について、管見のところ、もっとも適切であると思われる評言は、窪田空穂の「作意は、いま、天の原に現われて来た月に対して、若かったとき、本国の奈良で、春日の三笠の山から出た月の面影を認め、その対照によって、昔の恋しく、本国の恋しい心を余情としているものである。」というものであろう。しかし、こういった評言が可能なのは、詞書および左注に示された阿倍仲麻呂伝のなかで歌を機能させて享受するからにはかならない。したがって、歌だけを見ると、窪田も続いて述べているように、万葉歌の類型表現を通して造型された「おそらく万葉集に入れても単純な方の歌である」ということになる。

そこで、本発表では、万葉歌の類型表現と、当該を比較するとど

のような特色があるのか、ということを考察してみたいと思う。この方法については、もちろん疑義がある。古今集歌を万葉歌で注釈することになるからだ。しかし、発表者は、『古今集』の時代の古歌である万葉歌の表現と比較考究することについては、一定の意味があると考えている。なぜならば、『古今集』は、その序文において、『万葉集』に入らぬ古き歌も献上せよとの命を受けて編纂された書物であるからだ。それが、たとえ古歌を装った歌であつたとしても一定の意味はあると考える。その理由は二つある。当該歌は奈良の歌であり、『古今集』には、三笠山の月を歌う歌が他に一首もないこと。もう一つは、すでに『万葉集』時代において確立していた類型表現によって造型された歌だからである。したがって、筆者は万葉歌と比較することはあながち不当ではない、と考えているのである。

ために、本発表では、詞書と左注の阿倍仲麻呂の伝を切り離して、万葉歌の類型表現の中で当該歌表現の特色を考えてみた場合、いったいその表現をどう理解しなくてはならないのか考えてみたい、と考えている。

『源氏物語』「同じ心」考

—薫と大君を中心に—

同志社女子大学大学院博士課程前期 安永 美保

薫と大君の関係を考える上で「同じ心」の重要性については、すでに増田繁夫氏(『平安貴族の結婚・愛情・性愛 多妻制社会の男と女』)の研究がある。増田氏は、薫は大君の孤独な境遇や出家志向を由縁とし、「同じ心」を持つ同種の間人として互いに共感性や親密性を基礎づけた上に男女関係を成り立たせたいと考えていると読み解いておられる。

こういった事をふまえて、総角巻の薫と大君の夜明けの描写について考えてみる。これについて新編全集の頭注では「例の優艶な男女後朝の姿である。」と説明しているが、薫の例は「事実のない添ひ臥し」であり、単なる後朝の描写として扱うには疑問が残る。確かに、「例の男女後朝」にあたる光源氏や匂宮の後朝と薫の例は「もろとも」に」という表現が共通しており、類似した描写にも思える。しかし、この「もろとも」を分析した結果、源氏や匂宮の後朝は男君本位の対願望を反映した表現であるのに対し、薫の例では一時的かつ後の喪失を予感するものではあるが、薫と大君は一对幻想を互いに抱いている可能性が高い。「事実のない添ひ臥し」の経験が大君の薫への見方を変化させたのである。

一見、薫と大君の夜明けの描写は互いが「同じ心」をもった人間であることを認識した瞬間のように見える。しかし、結果として薫と大君は男女関係に発展せず、大君の死後に薫は「同じ心にもあらず」と嘆くに至る。この要因として、薫が大君に期待した「同じ心」と実際の心が大君の心が違っていたことが考えられる。大君に関係する「同じ心」は薫の会話文や心内文で使用される用例を除くと、その全てが妹の中の君との間に用いられている。

本発表では、薫の「同じ心」に加え、大君側の「同じ心」についても注目することで二人の心理背景について論じたい。「同じ心」は事実のない後朝を経験した二人の独特の関係を解釈する上で重要な表現である。

落葉宮と「食」

——夕霧巻の方法として——

フェリス女学院大学院博士課程後期 堀江 マサ子

『源氏物語』夕霧巻には、すでに指摘されているように、六つの

食事場面がある。その内訳としては、雲居雁側のものとして描かれる二場面、落葉宮側のものとして描かれる三場面のほか、花散里のもとで夕霧が粥を食べる一場面ということになるが、一つの巻に描かれる食事場面の数としては他の巻と比しても多いといえることができる。

『源氏物語』の「食」については、平安時代の食事の実態との比較のほか、身体論的な視座や「共食の思想」といった観点などから捉えられてきたが、中でも、『源氏物語』夕霧巻における「食」のあり方について考察した木谷真理子氏は、夕霧巻の六つの食事場面を、「食べる夕霧」「食べさせる夕霧」「食べられない女君」という視点によって把握しつつ、社会や家のルールを遵守しようとする夕霧とそのため傷つけられていく女君たちの姿を明らかにした〔夕霧巻と食〕『成蹊大学文学部紀要』四三、二〇〇八年三月。

本発表では、そうした先行研究に導かれながらも、とくに落葉宮と「食」との関わりを、夕霧巻の物語世界を構築していく方法として考えてみたい。夕霧から迫られた落葉宮は、翌日、母の一条御息所が「御台などこなたにてまゐらせたまふ」のに対して「触れたまふべくもあらず」という状態であつたが、一条宮に移動させられた折には「物まゐらせなどみなしづまりぬる」と語られ、夕霧との婚礼の場面では、「御手水、御粥など、例の御座の方にまゐれり」、「御台はまゐる」と叙述される。落葉宮に食べさせようとしているのは夕霧ばかりではなく、また落葉宮は単に食べられない女君というわけではないのであつた。物語はどうしてこれほどまでに落葉宮に「食」を与えようとするのか。そして、それに対する落葉宮の描かれ方にはどのような意義を読みとることができるのか。物語の表現により添いながら考察してみたい。

『蜻蛉日記』と「今」を表わす時間表現

——「過ぎにし年月ごろのこと」の現在化と「日記」意識——

ソウル大学HK教授 李 美淑

『蜻蛉日記』上巻に、藤原兼家と結婚して十二余年が経った康保三年（九六六年）四月の「このごろは、四月、祭見に出でたれば、かのところにも出でたりけり」（小学館新全集・上巻・一四五頁）という記述がある。その直前の三月、折しも自分のところに来ていた際発病した兼家の病気が契機となり、話者の道綱母が珍しく夫の兼家の家を訪ねるといふ体験の直後に語られたこの記述で用いられた「このごろ」という「今」を表わす時間表現は、『蜻蛉日記』の形成において注目すべきであると思われる。というのは、この表現は、全巻の序文でもある上巻の序文において、「過ぎにし年月ごろのこと」である「人にもあらぬ身の上」まで「日記」として書くとし、過ぎ去った自分の結婚生活を回想し書こうと宣言した執筆方法とも相反しており、従来多元的成立説において最初の執筆時点として多く指摘されてきた九六九年以前の時点であるにもかかわらず、「今」の時点に立った書き方になっているからである。この「このごろ」という表現については従来、「このごろ」に、さらに「四月」を加えたので、「このごろは、四月、祭見に……」となった（小学館全集、上村悦子氏『蜻蛉日記大成2』）、「このごろは」の後には、持続する行為や事象が述べられるのが普通。月名や、賀茂の祭見物という一回的な出来事が述べられるのは異例（岩波書店新大系）、「かくて」などあるべきところに本条だけ「このごろは」という兼家邸訪問の場面の強い印象を示すか（小学館新全集）などとされておき、「異例」な用いられ方として注されてもいる。

『蜻蛉日記』に用いられた「今」を表わす時間表現は、この「このごろ」（上巻八例、中巻一一例、下巻八例）の他に、「いま」（上

巻三四例、中巻三〇例、下巻三八例）、「今日」（上巻一一例、中巻二二例、下巻三三例）、「今年」（上巻一例、中巻二例、下巻三例）などがあるが、本発表では、これらの表現の用いられ方に注目し、回想し執筆するとしつとも「今」を表わす時間表現が『蜻蛉日記』に多く用いられる意味などについて、先行研究を踏まえつつ道綱母の「日記」意識というものを視野に入れ考えてみたい。

B会場

鶴峯戊申『洋語背誦歌』をめぐって

同志社大学大学院博士課程後期 丸山 健一郎

鶴峯戊申（つるみね・しげのぶ、一七八八天明八年—一八五九安政六年）は、江戸時代後期の国学者である。豊後臼杵の神職の家に生まれ、最晩年（一八五六安政三年）に水戸藩士として召抱えられた。通称は彦一郎、字は季尼・世霊、号は海西・究理塾である。国・漢・梵・洋の学を考究して、独自の学風を作り出そうとした人物とされる。鶴峯戊申に関する資料は、東北大学附属図書館狩野文庫にまとまって所蔵されており、その著作は多い。語学に関しては『語学究理九品九格総括図式』、『語学新書』、『早引蘭字通』が知られる。一般に、国語史・日本語史の分野では、日本語文法の研究にオランダ文典の知識を援用したことで知られる。

彼の著作『洋語背誦歌』（ようごはいししょうか）は、一八五五安政二年に成立し、翌一八五六安政三年に刊行されたものとみられ、往来物『小野算歌字盡』の手法にならない、四四〇首あまりの短歌の中に一三〇〇語以上の「洋語」とその訳語とを詠み込んだもので、暗誦による知識の定着をねらった、オランダ語初学者向けの啓蒙書・通俗語学書と云うべき書物である。『洋語背誦歌』は従来の研究史

では言及されることの少ない著作であり、先行研究にとぼしい。

本発表では現存伝本の調査結果から、少なくとも二種類以上の刷りが存在することを指摘する。また対照の結果、「洋語」と訳語部分の対応や、「梅核」の使用などで影響関係が確認されることから、典拠として算作阮甫『改正増補蛮語箋』を利用したものと考えられるため、その旨と対照結果の詳細を報告する。結果として、『洋語背誦歌』は、『改正増補蛮語箋』の享受資料の一つとして位置づけられる。これにより本発表は、『改正増補蛮語箋』の利用事例の報告であるとともに、幕末期に成立した一冊の通俗語学書の背景に、往来物の形式の踏襲と洋学資料の語彙の利用という相互補完的な関係が存在したことを示す事例報告でもありうる。

『諸道聴耳世間狙』と演劇

——巻五の二「祈禱はなでこむ天狗の羽箒」と

『霧太郎天狗酒醺』について——

東洋高等学校非常勤講師 大野 絵美子

明和三年（一七六六）に刊行された秋成の『諸道聴耳世間狙』（以下『世間狙』）は、中村幸彦氏の「実在の人物を作品内に登場させている」との指摘以来のモデル問題や、作品の典拠の探索など、その研究は多岐に及んでいる。加えて、近年堤邦彦氏により歌舞伎との関係が指摘されて以来、歌舞伎の典拠が数々報告されている。巻五の二「祈禱はなでこむ天狗の羽箒」（以下「天狗の羽箒」と略す。）については、既に堤氏により『平家物語』巻九との関係が指摘されているが、未だ歌舞伎との関係については言及されていない。今回、新たな典拠として歌舞伎『霧太郎天狗酒醺』を提示する。

当時、「天狗の羽箒」の目録の副題などから『平家物語』巻九を思い出す読者は少なくなかったであろう。また演劇愛好家は『天狗

酒醺』が当て込まれていることに気付くことも想定できる。しかし「天狗の羽箒」はそのどちらも逆手に取った展開をしている。さらに「天狗」という『平家物語』と『霧太郎天狗酒醺』に共通する素材により、典拠作品を組み合わせ、一つの詐欺譚として破綻しない形に仕上げていくという特徴がある。また、この二つの作品を下敷きにしながら、「菌薬の居合ひ抜」という巷間で話題となっていた話題を盛り込んでいることも注目すべき点である。利用している歌舞伎に現実の情報を入れ込むという構成をしており、世間の動向を作品に反映させる即応性や、世俗に対する作者の関心のあり方、手法の特徴がこの点に表れているからである。

「天狗の羽箒」は古典、歌舞伎、巷の話題、この三つの視点から構成されているが、読者は全ての視点を備えていなければならぬというのではない。しかし全てを備えた詐欺譚を作り上げたことは、新たな手法であるといえる。そしてこの手法が通用する読者層があったことも伺える。本発表では典拠や素材を元に、作者の興味関心、「天狗の羽箒」で作者が取った手法が生まれた背景について考察したい。

三宅花圃「萩桔梗」論

——女性の運命への視点——

鶴沼高等学校非常勤講師 岡西 愛濃

三宅花圃の「萩桔梗」は、明治二八年二月、『文芸倶楽部』臨時増刊「閨秀小説」に発表された。この作品は二人の若い女性のそれぞれの結婚をめぐる描かれたものである。

花圃は明治二一年六月に発表して、デビュー作となった『藪の鶯』以来、二人ないしは数人の女性の結婚を対比的な構図で描く手法を多くの作品でとってきた。そして、それらの結末には、軽率な性格

の女性には不幸を、慎重で忍耐強い性格の女性には幸福を与えて締めくくるといふ、勧善懲悪的な傾向がある。こうした花圃の小説の傾向には、花圃が小説を多数発表した『女学雑誌』からの影響が色濃く現れていると思われる。『女学雑誌』は、『藪の鶯』が女性が書いた最初の小説として話題になる以前から、女性が文筆業に携わる可能性に期待する文章を発表している。さらに、女性の書いた小説が次々に発表されるようになると、女性の書く小説が「教育的」であることを求めた。花圃の勧善懲悪的な傾向は、こうした『女学雑誌』の主張に適ったものであったと考えられる。

ところが、本作品は花圃のそれまでの傾向から大きく飛躍している。「萩桔梗」に登場する二人はいずれ劣らぬ優れた女性であり、彼女らがそれぞれに善悪とはかわりなく運命に翻弄され、本人の意思の及ばない幸と不幸に導かれていく過程が描かれる。つまり、花圃は、本作品において、人生を勧善懲悪を超えた計りがたいものとして捉え直しているのである。

本発表では、「萩桔梗」を明治二八年の女性作家が到達し得た一地点を見出せる作品と捉え、本作品が『女学雑誌』によって女性の作品に設定された枠をどのように乗り越えたのかを考察したい。

夏目漱石「倫敦塔」

——〈鳴らない音〉から立ち上がる作品世界——

フェリス女学院大学大学院博士課程後期 山本 真里江

夏目漱石「倫敦塔」は、「余」の語りによる、「二年の留学中只一度」訪れたロンドン塔において体験した出来事を回想し、描き出す物語である。作品は、一人称の「余」の眼前に映し出される世界から始まり、「余」によって選び取られたものについて語られ、認識したものが空想の発端となり、作中世界が展開されていく。そのた

め、当然のことながら非常に視覚的、映像的な世界であるといえるのであるが、しかし、視覚的な要素を多く持つ作中世界において鳴り響く「音」こそが、重要な意味を持つのではないかと考える。

例えば「余」が塔内を巡り始め、「鐘塔」へと進んだとき、「塔上の鐘」が鳴らされていた昔を想像する場面がある。「百年の響を収めて居る」というように、過ぎ去った時間と共に、鐘の「音」、鐘の「響き」がここに収められている。沈黙する空間にありながら、「余」の想像の中で鐘の「音」は響き渡る。つまり、「余」によって想像される鐘の「音」、鐘の「響き」から、塔内の物語は始められるのである。さらに塔内を巡る「余」は、「逆賊門」そして「聖タマス塔」へと進む中からも、自らの想像によって過去の「音」を見出ししている。罪人が舟から護送されたこの門で、「キーと軋る音と共に厚樫の扉」によって罪人は「浮世の光りとを長へに隔て」られる。すなわち「キーと軋る音」こそが「浮世」での最後の「音」となり、運命を隔てるときに「音」は鳴らされ、響くのである。

二十世紀の「余」の時代までも残されているロンドン塔という「空間」によって、過去と現在の「時間」は結び付けられ、過去と現在を「余」が往還する。現在の「余」が空想の起点となり、沈黙の中に描かれる〈鳴らない音〉の響きは、「余」の現在と過去の往還において、その狭間に位置する「音」として捉えられるのではないだろうか。それらを踏まえ、「余」によって語られる、〈鳴らない音〉から立ち上がる作品世界について考察する。

私たちのネットワーク

——夏目漱石「明暗」論——

早稲田大学大学院博士課程前期 伊藤 かおり

これまでの『明暗』論は、かつての恋人清子に捨てられた理由を

津田自身が知ることを『明暗』の結末に想定し、それをテキストの最大の「空所」としてきた。そのため、これまでの『明暗』研究はその結末を『明暗』のテーマとして「予想」するか、あるいは「アプローチ不可能なもの」として距離を取ってきた。しかし、「清子はなぜ津田を捨てたのか」という問いは「清子が去った理由がなぜ津田にはわからないのか」という問題を孕んでおり、重要な決定を迫られる度に「思考停止」に陥る津田の「本音」をテキストの「空所」として浮かび上がらせるものである。

本発表の目的は、書かれていない「空所」を憶測によって埋めることではなく、津田の「本音」が「空所」として機能することで、テキスト内にどのような運動を生み出しているのかを探るところにある。『明暗』の登場人物間の錯綜した関係性は早くから着目されていたが、いずれも特定の登場人物の〈人格〉を分析するに留まっており、これまで関係性そのものが俯瞰的に論じられることはなかった。

しかし、特定の人物の〈人格〉をいくら追っても、それらの相互の関係性から導き出される運動の内実を明らかにすることはできない。それを明らかにするためには『明暗』に登場するそれぞれの人物が何を希求し、どのように呼応し、それがネットワーク全体でどのような運動を生み出しているのかを分析する必要があるだろう。こうした問題意識の上に立って、本発表では津田を媒介にして形成される私たちのネットワークと、これまで否定的に評価されてきた津田の特質との連関について論じる。具体的には、津田の「本音」が「つくられた」ものであることを明らかにし、女たちが「判然」と自分の「本音」を語らない津田の姿勢に改善を求めているながらも、同時に津田が「本音」を語らなくてすむような環境を支えている矛盾について考察し、その理由を明らかにしたい。

日本文学と狂気あるいは精神病理学

高知女子大学教授 林 美朗

「日本文学と狂気あるいは精神病理学」という題で学会発表する。日本文学には、古典文学であれ近代文学であれ、狂気や精神病と親和性の深い作品が実は多い（よってこのような演題も提出可能である）。それは作家が精神病的狂気的な場合もあるし、その内容・表現が異様な精神病的な場合もある。

そこで、日本文学の古典（散文・韻文）と近代文学（同）の中から一つずつを選び、考察を加えてみたい。特に近代文学の場合は、精神病（病院）文学なる特異なジャンルを樹立し得るような分野も確かにあり、さしずめ統合失調症であったと推察される冷泉帝や禊子内親王の和歌や、最近書評を書く機会を頂いた夏目漱石などがその対象となろうか。

また日本の古典文学には、異本というジャンルも存在する。筆者が手掛けている平安朝の伊勢物語にも、小式部内侍（狩使）本という異本が存在する。通行の伊勢物語と比較すれば、誤写や誤読というより、創造的破壊と言った方が良さそうなものである。これも狂気あるいは精神病的と文学創造の良い例であろう。

このような分野は、文学の病跡学的研究とよく言われる。しかしながら文学の病跡学は、作家の病名のレッテル貼りでもなく、好事家の医者診断的遊びでもない。そのような精神病理を背負った作家がいかにしてその病いを生きたかの証しであり、それでどのような作品世界が案出できたかの評価である。

よってこのような研究も、日本文学研究の一分野となり得る。日本文学の病跡学的、精神病理学的研究を目論む所以である。

本発表では、古典文学では少し冒険であるが、伊勢物語の異本・小式部内侍（狩使）本と、近現代文学ではダダリスト・高橋新吉

(詩・小説)を取り上げ、検討してみたい。